

---

# 英語リメディアル教育における ポートフォリオの活用

— 英語学習における自律性の向上 —

清 田 洋 一

---

## 要約

本稿では、大学における英語リメディアル教育に適した言語ポートフォリオの検討を行う。学習ポートフォリオに関しては、言語教育だけでなく、初年時教育においても学習管理や学習評価など様々な形式で使用されてきた。本稿では、欧州評議会が言語学習の生涯学習的な継続性を支援するツールとして開発した『European Language Portfolio』(以下ELP)が、日本の英語リメディアル教育においても、その学習の自律性を高めることに役立つと考え、研究の第1段階として、英語学習の包括的な振り返りのアンケート調査・研究を行った。結果として、言語ポートフォリオを使用した英語教育を行う場合、メタ認知能力を必要とする度合いによって学習評価としての自己省察に差があることが判明した。英語リメディアル教育に適した言語ポートフォリオの検討にあたっては、その指導方法に適切な配慮が必要である。

## キーワード

英語リメディアル教育、言語ポートフォリオ、自律的学習、生涯学習

## 1. 背景

### 1.1. 英語リメディアル教育の必要性

平成23年度より、小学校の5、6年生から英語の学習活動が本格的に開始された。これによって義務教育の年数に関しては8年間の英語学習が保証されることになる。しかし、英語教育の実態としては、学齢につれて言語材料やスキルを確実に習得する生徒は全体の一部で、多くの生徒が英語学習に困難を抱えている。

文部科学省の平成15年度の教育課程実施調査<sup>1)</sup>によると、中学校の第3学年で、英語の授業が「分からないことが多い」割合が18.7%、「ほとんど分からない」割合が9.6%で合わせると28.3%と、全体の3割近くになる。また、平成21年に、ベネッセ教育研究開発センターが行った中学2年生を対象にした調査<sup>2)</sup>でも、授業の理解度に関して、「30%くらいわかっている」と「ほとんどわかっていない」は合わせて3割弱という結果で、授業の理解度に関して、類似の傾向となっている。英語学習の初歩の段階で、全体の3割が学習につ

いていけないという状況は、その後の高等学校や大学での長期に及ぶ学習を考慮すると、深刻な事態と言える。また、同調査によると、英語を苦手と感じている中学生は調査対象の約6割に達する。実際に、中学や高校で基礎学力を十分に習得できていない大学生のための教育として、基礎学力養成を目指したりメディア教育の必要性が論じられ、すでに多くの大学で実践されている。

## 1.2. 英語リメディアル教育の対象となる英語能力

英語リメディアル教育の問題点を論じる前提として、本稿で言及する「英語リメディアル教育の対象となる大学生」の英語能力について検討する。大学という高等教育機関の役割を考えた場合、実際にどのような能力が対象となるのだろうか。一般的に、大学生の望ましい英語力の定義として、学校という教育機関が用意した基礎学力のカリキュラムから、個人の目的に適した学習へと向かう段階、つまり、「自分の目標に適した英語学習を自主的に行えるレベル」とするのが妥当であろう。日本における一般的な英語能力検定試験を実施している日本英語検定協会は、英語検定合格者の英語学習と英語使用の状況を分析した調査研究を発表している<sup>3)</sup>。各合格級の受験者の状況を調査した結果、次のような3つのタイプに分類している。

依存型学習者：指導者から与えられた教材中心で、学習を進める上で指導者への依存度が高い。

自立型学習者：指導者から与えられた教材だけでなく自ら教材を広げ、指導者からの自立傾向が強まる。

自立型使用者：必要に応じて学習をしながら、実際の英語使用が顕著になる。

英検3級の合格者までを依存型学習者、準2級から2級までの合格者を自立型学習者、準1級以上を自立型使用者としている。その意味で、英検レベルの準2級の能力に達していないレベルは、「依存型学習者」、つまり英語学習において指導者への依存度が高い学習者と考えられ、英検の3級前後のレベルを大学教育におけるリメディアル教育の対象と捉えることは妥当であろう。本研究では、この英検の3級前後のレベルを対象に、英語リメディアル教育の検討を行う。

## 1.3. 英語リメディアル教育の問題点

英語リメディアル教育の対象となる大学生の一般的な意識として、中学校からの英語学習における不成功体験に起因する「苦手意識」や「英語嫌い」という態度が、その後の高校、大学での英語学習においても回復できない傾向がある（Kiyota, 2009）<sup>4)</sup>。英語学習には蓄積的な知識や技術が必要なため、基礎力が不足したままでは、授業で学習の難易度が上がるにつれて、学習のやり直しはより困難になり、そのため英語学習に対してさらに否定的な態度になる場合もある。

リメディアル教育の対象となる大学生が英語学習に対して否定的な意識を形成するようになった主な理由の一つとして、「学齢が上がるにつれて、文法や単語が難しくなり、ついに行くことができなくなった」「中学や高校でいくら学習しても成績が上がらず、(英語の学習を)あきらめた」という、理由があげられる（Kiyota, 2009）。前述したベネッセ教育研究開発センターの調査においても、「英語でつまづきやすいポイント」では、「文法が難し

い」(78.6%)、「英語で思うような点が取れない」(72.7%) が1、2位となっている。このことは英語の学習が、生活の中で使用する手段としての言語学習とは認識されていないことを示している。また、「生徒が一番受けたい授業」の一番多い回答が、「入試に役立つ授業(38.9%)」となっていることも、コミュニケーションの道具として言語の学習であると意識されていないことを示している。

英語リメディアル教育の対象となる学生の場合、英語学習が「学校における苦手な教科」という狭く否定的な意識に留まり、それが定期試験などで繰り返し強化されてきたと考えることができる。日本の中学校や高校という基礎段階における英語学習の現状は、一般的に学齢に沿って設定された文法や語彙の正確な知識を問う評価に立脚した学習となっている。現状の自分の英語能力で何ができるのかという観点ではなく、何ができないのかという否定的な観点からの学習になっている。外国語学習と自尊感情の関連を研究した Rubio (2007)<sup>5)</sup> は、外国語学習が多くの学生にとって「不安感をもたらしやすい体験となる」としている。その視点からも、たとえ不完全であっても学習者のその時点で持つ言語能力を活用したコミュニケーション活動を励ます学習活動であるべきだが、実際はその方向性とは逆になっている。このことが、中学段階での授業についていけない生徒や苦手意識の多さにつながり、その後の高等学校や大学において英語学習に対する低い動機や否定的な学習態度の大きな一因と考えられる。限られた能力でも、その時点から、あきらめずに基礎学力を向上させようとする意識を持たせることが、英語のリメディアル教育を成立させる重要な鍵となる。つまり、学習者の自律性の養成をめざした学習が必要となる。

#### 1.4. 行動志向の言語学習と外国語学習ポートフォリオ

英語学習に限らず、外国語学習は本来、個人の目標を実現するためのものである。自分のための学習として、目標を設定し、それに適した学習実践を行うこと、つまり自律的な学習意識が必要となる。「学校における苦手な教科という狭く否定的な意識」を改善する考え方として、外国語学習を学校という枠にとらわれず、学習者個人の社会的な必要性と自己の責任において継続すべきものとする「行動志向の言語学習」の考え方がある。ヨーロッパ各国の言語教育の改善を目指す欧州評議会は、この考え方を言語教育の理念として、実際の言語政策に反映させ、『ヨーロッパ言語共通参照枠』(以降CEFR)という言語教育の共通枠を開発した。この参照枠は、言語は使用することを前提として学習するべきであるという行動主義的な言語観に立ち、外国語を使ってできる具体的な項目 (Can-do Statements) を中心として、学習者が自律的な学習を生涯にわたり継続することを奨励している。

生涯学習における自律性の形成について、久村 (2010)<sup>6)</sup> は次のようにまとめている。「生涯学習は、この意味するところは、「(自ら) 学習するようになること (learning to learn)」である。つまり、自学自習ができる⇒自分の学習管理ができる⇒自律学習につながる、ということである。必要なときはいつでも、どこでも、自分の意思で言語の学習を始めることのできるということである。言語学習は楽しいという充実感、役に立つという実用感を生涯持ち続けるという長期目標、つまり、内発的動機付けを、言語学習指導に取り入れるという意味であると解釈できる。Learning to learnを身につけるためには、何ができるようになればよいのかを透明化する (transparency)。透明化された記述文を使

って自己を省察する (reflection)。省察を習慣化することによって、適切な自己評価ができるようになり (self-assessment)、学習を自己管理するようになる (ownership)。そして、自律へと向かう (autonomy)。一旦自律すれば、一生継続 (life-long)。」

「1.2.」で引用した調査結果を考えると、英語リメディアル教育に限らず、日本の英語教育はこれまで学校という枠の中で完結し、上記のような個人のニーズに基づいた学習の継続性への視点が欠けていた。そのことが「授業について行けない」学習者の増加につながる大きな原因の一つになっていると考えられる。それでは、具体策としてどのように、学習者の自律性を高めればよいのであろうか。

前述したCEFRの自律的な学習を生涯にわたり継続する言語学習の考えを実現するために、個人的なツールとして欧州評議会は『European Language Portfolio』(以下ELP)を完成させた。ELPはヨーロッパ各国で実践され、多くの成功例が報告されている。日本においても、ポートフォリオは言語学習だけでなく、学習の目標設定とその省察ツールとして、大学の初年時教育などに活用されている。ELPの実践を考慮すると、外国語教育における言語ポートフォリオの活用は、自律的学習者の養成ツールとして、日本における英語リメディアル教育の改善に役立つ可能性がある。本研究では、このELPの考え方を基に、リメディアル教育に適した言語ポートフォリオの妥当性を検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2.1. 研究目的

英語リメディアル教育に適した、自律的学習者の養成ツールとしての言語ポートフォリオの有効性を検討する。さらに、言語ポートフォリオの活動として、英語のリメディアル教育対象者が学習の自己省察に取り組む場合、どのような点に配慮すべきか検討する。

### 2.2. ポートフォリオと外国語学習における先行研究

ポートフォリオに関する先行研究として、まず、日本における一般的なラーニング・ポートフォリオの取り組みを検討する。その次に、言語学習のポートフォリオの代表的な例としてELPを検討し、最後に日本における外国語教育への応用例を検討する。

#### 2.2.1. ラーニング・ポートフォリオ

ポートフォリオは、言語学習だけでなく、様々な分野において活用されている。ラーニング・ポートフォリオについて、中央教育審議会は次のように定義している<sup>7)</sup>。

「学生が、学習過程ならびに各種の学習成果 (例えば、学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など) を長期にわたって収集したもの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学習過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図っていくことを目的とする。従来に到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される。」

上記の定義からは主に「評価ツールとしての役割」が強調されていることがわかる。「学習過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図っ

ていくことを目的とする。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うこと」は、学校での文法や語彙の知識という主に言語知識による成績評価で自信や意欲を失ったりメディアル教育の学生にとって、一度の定期試験の比重が大きい評価でなく、学習への取り組みを様々な視点から評価できるポートフォリオの可能性は重要となる。

ラーニング・ポートフォリオには評価だけでなく、様々な役割がある。小嶋 (2010)<sup>8)</sup> は、ラーニング・ポートフォリオを、土持 (2009)<sup>9)</sup> と Zubizarreta (2004)<sup>10)</sup> を参照して、以下のようにまとめている。

- (1) 学習哲学 (philosophy of learning) : 省察的な学習過程の叙述
- (2) 学習到達度 (achievement of learning) : 成績証明書、コース概要、受賞
- (3) 学習証拠 (evidence of learning) : 研究論文、エッセイ、データ分析
- (4) 学習評価 (assessment of learning) : フィードバック、試験結果
- (5) 学習関連性 (relevance of learning) : 実践的応用、個人的・専門的成長
- (6) 学習目標 (learning goal) : 学習能力向上、フィードバックへの反応
- (7) 付録 (appendices) : 証拠資料

小嶋 (2010) は、ラーニング・ポートフォリオの効用として、「協働的・省察的学びの課程の記述を通して学習者のメタ認知能力が継続的に高まり、自己の学びへの責任感と自律的姿勢が育まれる」として、自律的学習への効用を指摘している。

## 2.2.2. ヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP)

外国語学習のためのポートフォリオとして、最も大きな規模で実際に使用されている例は、ELPであろう。ELPは欧州評議会の言語政策部門で開発され、その目的は、以下の2点となる。学習者の自律性、複言語主義、異文化理解への意識と能力向上を支援すること、さらに、学習者にその言語学習における達成度とその学習体験を記述できることをめざすことである。

また、『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠』<sup>11)</sup>には、ELPの機能について次のように記述されている。「(このELP)を使えば、広い意味での言語のあらゆる種類の学習体験を自己報告することで、学習者の複言語的な能力発達の道程を記録にとどめることができる。」「複言語的な能力発達」とは、多言語主義がある地域において複数の言語が使用される状況を示すのに対し、個人の内部における複数の言語の存在を指す。ヨーロッパという多民族的な地域の平和的共存を志向する上で、個人が自国の言語のみを使用するのではなく、複数の言語を使用できるようになることは重要な課題となっている。

ELPはCEFRに準拠した生涯学習としての言語学習に関する個人の記録であり、具体的な構成は、自分の言語能力を判断する言語パスポート (language passport)、学習目標を設定し、それを自己評価することを目的とした、言語学習記録 (language biography)、学習成果など、様々な関連資料を記録、保管する資料集 (dossier) の3部構成となっている。

ELPの特徴は、ヨーロッパのどの地域においても、またどの年齢段階においても、個人の外国語学習の継続性が保たれるように図られた、自律的な学習の支援ツールである。「外国語学習の継続性」を考える上で、重要な視点を提供している。日本における英語リメディアル教育において、言語ポートフォリオを活用する場合、自律性の向上につながる継続性をどのように反映させるかが重要な検討課題となる。

### 2.2.3. 日本における言語ポートフォリオの実践研究

#### (1) リーディングとライティングの学習プログラム

峯石 (2002)<sup>12)</sup> は、大学の授業としての英語のリーディングとライティングの学習プログラムに、ポートフォリオ作成を組み込み、学習者の質的な変化を調査した。結果は、統制群と実験群において、学習後のテストの結果には統計的な有意差はみとめられなかったものの、質問紙調査の結果、以下の点においてポートフォリオの効果が認められたとしている。

- ・英語学習における動機づけの向上
- ・英語学習に対する積極性の向上の効果
- ・ポートフォリオ作成に関する好意的反応の効果

以上の結果から、峯石 (2002) は、日本の英語教育へのポートフォリオ・プログラム導入は非常に望ましいものとしている。

#### (2) 資格試験対策としてのポートフォリオ学習の試み

理工系の大学で英語教育を担当している神谷 (2011)<sup>13)</sup> は、「TOEIC 対策授業におけるポートフォリオ学習の試み」として、TOEIC 対策を主眼としながら、様々な活動を盛り込んだ授業設計を行っている。学習記録用紙、出席カードによって受講生からコメントや質問を収集し、学生が苦手とする問題や解法をまとめさせる作業や、各自に適した学習方法を報告させるといった取り組みを行っている。神谷の取り組みも、自律的な学習者の養成を目標にしたものとなっている。

#### (3) 高等学校におけるポートフォリオ学習の試み

土持 (2009) は、ラーニング・ポートフォリオを包括的に紹介した研究において、高校の英語学習にポートフォリオを活用した伴 (2007)<sup>14)</sup> の実践例を紹介している。この取り組みは、統合型ポートフォリオ・プログラムとして行われた。以下に土持 (2009) のまとめによるその活動とポートフォリオの形式、目的の設定の表を示す。

表 1 伴の統合型ポートフォリオの取り組み (土持の作成による, 2009)

活動	基本授業	自由課題	協同授業	個人まとめ
型	working portfolio	working portfolio	assessment, display portfolio	display and evaluation portfolio
目的設定	教員中心	生徒中心	教員・生徒	教員・生徒

手順として、日付順にファイルした個別のワーキング・ポートフォリオをグループによる協同活動を通して、自らの問題点に気づかせるピア評価を行っている。結果として、学力の向上 (実用技能検定筆記試験問題から作成した2回の試験結果から) と、ポートフォリオへの好意的な取り組みと達成感の高さから、実践例は成功だったと結論している。

#### (4) 大学における外国語教育共通カリキュラムとしてのポートフォリオの活用

鷺巣 (2009)<sup>15)</sup> は、大学の外国語教育が抱えるさまざまな問題の解決策のひとつとして、ポートフォリオと到達レベルを導入した例を報告している。具体的には、外国語教育カリキュラムに含まれる英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語、ロシア語、留学生対象日本語の8言語を包括する『外国語ポートフォリオ』(以下、ポートフォリ

オ) と共通参照レベルに相当する「外国語学習の到達レベル」(以下、到達レベル) を導入している。この取り組みは、学習者自身が自己の言語能力の到達度を自己評価するという点で、ELPの言語パスポートの役割に近いものとなっている。

### 2.3. リメディアル教育対象の学生への応用

上記の実践例を概観すると、日本のEFL環境の集団的な英語学習において、ポートフォリオを活用した取り組みは、一般的に、学習者の自律的な学習態度の向上を目指し、その効果が認められている。項目構成として、これらのポートフォリオに共通しているのは、学習の振り返りと自己チェックという形式で、記録された学習結果についての「学習への評価・反省」の記述が中心となっている。さらにCan-do項目としての具体的な能力の到達度チェックが追加されている。しかし、英語学習における成功体験が乏しい、いわゆるリメディアル教育対象の学生の場合、学習の取り組みの基本姿勢として、自分の言語能力に向き合おうとする意欲が低いので、個別の授業への効果的な振り返りを期待できない。

リメディアル教育の対象となる大学生の調査 (Kiyota, 2009) から、中学校からの英語学習における不成功体験を起因とする「苦手意識」や「英語嫌い」という態度が、その後の高校、大学での英語学習においても回復できない傾向があることが判明した。英語学習には蓄積的な知識や技術が必要なので、基礎力が不足したままでは、授業で学習の難易度が上がるにつれて、学習のやり直しはより困難になり、そのため英語学習に対してさらに否定的な態度になる場合もある。クラスという学習集団の中で、学習に躓き、そこで生じた不安感、疎外感、無関心を経験する内に、英語の学習動機を失い、それが大学まで続いている傾向がある。このような否定的な意識改善に、個別の授業の学習結果についての「学習への評価・反省」の記述中心のポートフォリオは、必ずしも適さない可能性がある。また、これまでの実践研究は、個別の学習の取り組みに対するものが中心となり、ELPの継続性という重要な視点が十分に活かされていない。

#### 2.3.1 リメディアル教育に特化したポートフォリオの項目の検討

先行研究で紹介した鷲巢 (2009) は、ポートフォリオを、「学生が日々の学習に意識的に向き合い、そこで達成した能力を確認し、その自己評価を次の目標設定に活かすという一連の内省のための装置」と位置づけている。その最大の課題の一つとして、「学生の自律的学習能力を育てることにある」と述べ、具体的なポートフォリオの構成要素として、次の5つを挙げている。

- a. 外国語学習履歴、資格、学びたい外国語、理由、目標などを記述する欄
- b. 言語別チェックリスト
- c. 学習ストラテジーやコミュニケーションストラテジー、異文化コミュニケーション能力のリスト
- d. 在学中の履修履歴
- e. 学びの記録

英語リメディアル教育の対象となる学生の場合、基礎学力が十分でないものが多いので、いきなり「b. 言語別チェックリスト」による自己評価だけを行うことは、さらなる意欲の低下を招く恐れがある。そこで、本研究では能力の自己評価の前に「d. 在学中の履修履歴、e. 学びの記録」を大学入学以前の記録まで拡大し、自己の学習履歴を内省する必要性があると

判断した。その理由は、リメディアル教育の対象となる大学生の意識を考慮した場合、大学に入学する以前からの学習経験がその否定的な態度の形成に大きく影響していた (Kiyota, 2009) ことから、大学の授業での振り返りだけでなく、それ以前の学習経験にきちんと向き合い、否定的な意識を形成するに至った経過を自己分析する必要があると考えたからである。本調査に先だって、筆者はこれまで担当する英語のすべてのクラスにおいて、学期の冒頭における学習者の基本的な情報収集として、小学校および、中学からの英語学習の学習履歴を時系列的に振り返り、記述するアンケートを行ってきた。授業対象者は1、2年次の必修の英語の授業、およびその再履修クラスであり、英語を専修する学科の学生は含まれていない。統一したスタイルのアンケートを使用後のべ500人以上の学生に共通する結果として、大学生段階の英語力とその学習スタイルが長年の蓄積によって形成されたにもかかわらず、多くの学生がそれまでの自分の学習を振り返る経験がない実態が明らかになった。

小嶋 (2010) は、ラーニング・ポートフォリオの効用として、協働的・省察的学びの課程の記述を通して学習者のメタ認知能力が継続的に高まることを指摘しているが、英語リメディアル教育の対象となる学生は、その学習の取り組みにおいてメタ認知能力を有効に活用できていないことが報告されている (酒井, 2011)<sup>16)</sup>。メタ認知能力は効果的な自己省察を行う上で、必要な能力である。その点で、リメディアル教育に適した言語ポートフォリオを開発するには、メタ認知能力という観点も検討する必要がある。

## 2.4. 調査方法

### 2.4.1. 調査対象者

調査対象者は、一般教育としての英語のクラスに在籍する49名の大学生である。調査対象者を英語技能検定のレベルで2つのグループに分けた。一つのグループは、2学年の英語のクラスと、英語の再履修クラスの学生、合わせて26名。このグループは英語技能検定の3級以下で構成されている。もう一つのグループは2学年の英語のクラスに在籍する23名である。このグループは英語技能検定試験の3級以上である。

英語技能検定試験の3級レベルでグループ分けをした理由は、2009年に英語の学習動機の調査を行った際に、3級レベルを境界線として、英語の学習動機に質的な違いが見られたことである (Kiyota, 2009)。結果として、3級レベル以上の学習者は英語学習を進んで継続していこうと内発的な動機の傾向があるのに対して、3級レベル以下は「卒業に必要な必修科目だから」などのような外発的な動機傾向であった。この学習意欲の質的な違いは、その学習態度の自律性にも連動していることが予想される。また、もう一方のクラスは、習熟度別で一番上のクラスとして、3級レベル以上で、平均すると準2級レベルが中心となっている。もう一方のグループと比べてそれまでの学習履歴とその動機が異なることから、自己省察においてもその取り組み方違いがあることが予想され、ポートフォリオの項目において比較・検討ができることを期待した。

### 2.5.2. 調査方法

調査方法は、アンケート調査と、その結果の聞き取り調査である。アンケート項目は、自律性の向上を目的としたポートフォリオの項目を想定し、以下のように設定した。

- (i) Can-do項目 (英検3級の項目を基に、学生の実態を考慮して作成)
- (ii) 英語学習の目標



- (iii) 興味・関心のある分野（英語学習に限らない）
  - (iv) 自分の好きな英語の学習方法
  - (v) 小学生から、現在に至るまでの学習履歴（各年齢時の学習動機も1～5段階で自己評価）
- さらに、これらの項目が自分の英語学習において有効であるかどうかを質問した。  
上記の項目設定の理由は以下の通り。

「Can-do項目」は、資格試験として社会的に認知されている英語検定の基準で評価できることにより、継続的に評価できる透明度の高い基準が、その自律的な学習に役立つと判断した。英語学習の目標は、「Can-do項目」の各能力において、現在の能力と、大学卒業時の目標として記述させた。項目は、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能別に分類されており、その例は次の通りである。「読む：日本語の注や説明がついた英字新聞で、興味・関心のある話題に関する記事を理解することができる。（週刊ST/ Asahi Weeklyなど）」、「聞く：買い物で店員からの簡単な説明を聞いて、理解することができる。（サイズ、割引、品切れなど）」、「自分の学校（会社）について、簡単な紹介をすることができる。（場所、人数、特徴など）」、「書く：自分が読んだ本や見た映画について、自分の感想を書くことができる。」

また、個々の能力だけでなく、「将来英語を使ってやってみたいこと」として、自由記述させた。これは自己の英語学習を成績のためではなく、自分のためのものとして考えることができるかを評価するためである。また、「興味・関心のある分野」については、自分の趣味や関心事と英語学習を関連づけて考えられることを目指した。「自分の好きな英語の学習方法」は、自分に適した学習方法を意識させるための項目である。「小学生から、現在に至るまでの学習履歴」は、今回の調査の中心的な項目で、英語学習の学習履歴を時系列的に振り返り、自己の学習意識とスタイルの形成の振り返りを期待した。

今回の調査では、研究の第1段階として、学習者の英語学習の包括的な振り返りに焦点を当てることを目的としている。そこで、「小学生から、現在に至るまでの学習履歴」を振り返る取り組みを行い、その記述内容を分析し、内省的な記述の充実度を評価することとした。アンケートの指示には、「学習理解」「学習意欲」「授業」「自己学習」「今後の学習」について記述することを明記し、口頭でも同様の指示を行った。内省の記述の充実度の評価基準は、上記の指示に沿った振り返りがきちんとできているかいなかという観点で行った。

「小学生から、現在に至るまでの学習履歴」の分析方法は、個人の英語学習に対する態度を形成する要素として、記述内容を「学習理解」「学習意欲」「授業」「自己学習」「今後の学習」の5項目に分類し、それぞれの項目の記述の充実度を5段階評価した。評価基準は、それぞれの項目がきちんと記述されているかどうかを評価した。

分析方法は、自由記述という質的なデータを量的なデータに変換するコーディングとなる。本研究のデータは質的なデータであり、本来、質的分析はその内容についてデータをコード化して、定性的なコーディングを行い、それを評価していくという分析方法が一般的である。しかし、本研究では、アンケートの個々の内容の分析ではなく、アンケートに記述された振り返りの充実度に焦点を当てているので、記述を通してどれだけ充実した内省ができたかを評価している。その点で、英語学習に対して否定的あるいは肯定的な内容なのであるかは評価しない。否定的な内容であっても、評価基準に照らした振り返りができている場合もある。評価の客観性を保つために、本来なら複数の評価者の値を採用するという方法も考えられるが、評価者によって基準がぶれる可能性もあり、今回は評価基準を

厳密化することで、その客観性を保つことを目指した。評価基準は以下のように設定した。

- ・5段階評価とする。
  - ・5分野の各項目について、言及している場合は中心値の3とする。
  - ・内省事項について、具体例の提示の有無と記述の適切さにより1～2点の評価の幅を持たせる。
  - ・各学齢時について、各分野の項目について評価し、全学齢に渡る平均値を算出する。
- 以下に、記述項目、自己省察の内容、および記述事例と評価例（最高点と最低点）を示す。

表2 内省の記述と評価例

項目	自己省察の内容	5段階中、5点の記述例	5段階中、2点の記述例(注)
学習理解	それぞれの学齢時の授業の理解度	中学2年生の時に、文法事項や語彙が難しくなり、ついて行けなくなった。(理解度について具体例の記述あり)	中学の時から、英語がわからなくなった。(具体的な分野での理解度の記述なし)
学習意欲	それぞれの学齢時の学習意欲の度合いとその原因	中学3年の時のALTがとても明るく、活発で、その活動をきっかけに英語をもっと話したくなった。(意欲を喚起した具体例とそれに関連した言語活動の記述あり)	高校受験のために、少しは勉強しなければいけないと思った。(どのような学習をしたのか記述なし)
授業	それぞれの学齢時の授業の分析(教師の教え方、クラスの雰囲気など)	高校2年になってからは、授業がすべて受験対策だけのものになり、英語が嫌いになった。毎回、大学受験の過去問を渡され、長文を全訳するという課題が特にいやだった(具体例の記述とそれに伴う意識の変化の詳しい記述あり)	英語の授業が好きだった。(なぜ好きだった理由の記述なし)
自己の学習	それぞれの学齢時の学習への取り組み方の自己評価	この年は高校時代にできなかった箇所をずっとやっていた。最後まで終わらなかった単語帳を学校に来るまで眺めていて、ほとんどの単語を覚えることができた。夏休みも英語の長文を読んだりしたので、明らかに昔より英語が理解できるようになったので、また少し英語を好きになった。(自己の学習の具体例の記述あり)	ノートをまとめるのが面倒くさかった。(具体例はあるが、それに対する自己評価なし)

今後の学習	今後の学習の方向性	TOEICの勉強が入ってきたので、うれしく思っている。単語がおろそかになっているし、リスニングの力も伸ばしていきたいので、授業を活かしていきたいと思っている。(具体的な学習例の提示あり)	単位と就活のためにやる(どのような学習をするのかについての具体的な言及なし)
-------	-----------	---	--

(注：記述なしは1点)

このアンケート結果を踏まえ、追跡調査として、個別に聞き取り調査を行い、(i)～(v)までの各項目が、自律的な英語学習への意識向上についてどのように役立つか調査した。

## 2.6. 調査結果

### 2.6.1. ポートフォリオの有効性

まず、ポートフォリオの有効性については、英検3級以下のグループでは26人中、13人が、「役に立つ」、4人が「とても役に立つ」と答えている。合計で65%が有用であると考えている。一方、英検3級以上のグループでは、23人中、15人が「役に立つ」6人が「とても役に立つ」と答えている。合計で91%が有用であると考えている。両方のグループとも、ポートフォリオを活用した学習の振り返りの有用性を認めているが、英検3級以上のグループの方がその有用性をより高く評価している。

### 2.6.2. 項目別の記述の充実度の結果

記述内容を「学習理解」「学習意欲」「授業」「自己の学習」「今後の学習」の5項目のグループ別の結果を以下に示す。

表3 グループ別記述の充実度

グループ	記述項目				
	学習理解	学習意欲	授業	自己の学習	今後の学習
3級以上	3.48	3.78	3.48	3.91	3.35
3級以下	2.81	3.12	2.50	2.81	2.35
t検定	t(47)=2.76, P<.01	t(47)=3.21, P<.01	t(47)=3.69, P<.01	t(47)=3.74, P<.01	t(47)=3.49, P<.01

いずれの項目も、2つのグループにおいて有意な差が見られた。特に、「授業」「自己学習」および「今後の学習」が他の2項目に比べ、その差がやや大きかった。「学習理解」における分析が、「授業がわかる(わからない)、ついて行けた(ついて行けない)」、「学習意欲」における分析が「やる気が出た(やる気を失った)」という、比較的単純な振り返りであるのに対し、「授業」「自己学習」および「今後の学習」は、授業内容の分析や自分の学習の進捗状況の把握、今後の学習の目標設定など、比較的高いメタ認知能力を必要とする項目であった。

### 2.6.3. 聞き取り調査結果

聞き取り調査は、3級以下のグループの内、再履修クラスに在籍する3名で行った。一般的に、全学共通科目としての1学年の必修英語の再履修クラスに在籍する学生は、病気などの不可抗力的な理由を除いて、その学習意欲に何らかの問題を抱えている場合が多い。そのような学生にと

って、言語ポートフォリオが自律的な学習態度の向上に有効かどうかを検証する狙いがあった。

以下の表は、(i) ~ (v) のそれぞれのポートフォリオを基に、未記入の部分聞き取り調査し、情報を補足したものである。表内の(聞き取り)とある箇所は、記述が不十分で、面接で聞き出し、補足した情報であることを示している。

表4 聞き取り調査結果

項目	事例1 (男子学生、2学年)	事例2 (男子学生、2学年)	事例3 (女子学生、2学年)
学習理解	テストの点も低く、ついていけなかった。高校での受験対策の授業は難しすぎた。	中学時代は通っていた塾のプレッシャーで、よく勉強したので成績はよかった。高校では長文読解など受験勉強に苦労した。	中学は1年はかんたんだったが、だんだん教科書が難しくなった。高校時代は長文が嫌いだった。大学の授業はそんなに難しくなかった。(習熟度別学習の中級レベル)
学習意欲	中学1学年は新しい科目で興味があり、好きだった。その後、文法が難しくなり、嫌いになった。高校、大学と意欲は低いまだだった。外国人のクラスはやや楽しかった。(聞き取り)	中学時代は強制的に勉強をやらされていたので、つまらなかった。高校時代も英語会話を除いては、楽しめなかった。クラスメイトと成績競争みたいなことはやっていた。大学1年は授業に出なかったが、今はipodを利用したりして、英語学習が楽しくなっている。(聞き取り)	中学1年は一番やる気があった、だんだん難しくなり、やる気を失った。高校は先生もクラスの雰囲気もよかったが、勉強しようという意欲がわかかなかった。高校時代はクラスメイトと一緒に授業なので、会話の授業も楽しめた。大学は後期の授業から面倒くさくなって、休んだ。
授業	中学では覚えるべき単語や文法が増え、いやだった。文法は難しすぎて、ついて行けず。高校では受験対策授業で、ALT以外はおもしろくなかった。大学では自由な雰囲気、授業に出なくなり、単位を落とした。(聞き取り)	中学と高校を通じて、成績のための学習だった。高校の授業は特に、教科書は使わず、プリントによる長文読解などの受験対策の授業だった。ひたすら和訳のみ。大学の授業は一方通行でおもしろくなかった。	中学の時は、2年と3年の先生が自慢話ばかりするので嫌いだった。和訳中心の授業だった。クラスの雰囲気はよかった。高校時代はクラスの雰囲気はよかったが、授業の長文読解が嫌いだった。オーラルの授業は楽しかった。(聞き取り)
自己の学習	基本的に飽きっぽいタイプ。高校では勉強せず、ゲームセンターやマックで遊んでいた。ただ、海外の映画やドラマは好きで、字幕で見ている。英語で話すのは好き。基本的に追い込まれないとやらないタイプ。(聞き取り)	強制的な勉強のせいで、文法や単語などある程度の基礎的な知識はある。高校の日常会話で使うような表現を教えてくれる先生の話は楽しめた。大学の1年は学園祭の委員になり、楽しく授業に出なくなった。その後、ゲームデザインの専門学校に通ったが、英語の必要性を感じて、再度大学に戻った。(聞き取り)	中学と高校と和訳中心の授業でつまらなかった。高校のオーラルの授業は楽しかった。進んで会話をしたが、単語や文法を覚えることはやらなかった。大学の受験はAO入試しか考えていなかった。再履修になったのは、学校に行くのが面倒になったから。(聞き取り)

<p>今後の学習 (英語でしてみたいこと)</p>	<p>海外の映画を英語のままで見られるようになりたい。海外の人と交流してみたい。</p>	<p>itunes StoreでCNNなどのニュースサイトを読むのが好きなので、それを続けたい。外国の映画を字幕なしで見られるようになりたい。海外のメーカーからの発表を理解できるようになりたい (Apple など)。海外に行きたい。理系なのでそれに役立つ学習も必要かもしれない。</p>	<p>とりあえず、現在の授業の単位は落とさないようにすること。海外に行って現地の人と交流したい。</p>
<p>ポートフォリオに関して</p>	<p>自分の英語学習について、このように振り返ったことはなかった。自分の弱点が改めてわかった。英語の学習で目標を持ったことはなかったが、好きなこと (映画など) と関連させることもできるとわかった。(聞き取り)</p>	<p>自分の英語学習について、このように振り返ったことはなかった。役に立つと思う。Can-do 項目は目標設定として、役に立つと思う。自分の弱点や重点的に学習するところがわかるので、1〜2ヶ月ごとに振り返るとよいと思う。</p>	<p>自分の英語学習について、このように振り返ったことはなかった。(教師と) 話してみ、役に立つと思った。時々、このようなこと (振り返り) をしていたら、再履修にならなかったかもしれない。(聞き取り)</p>

事例1、3の学生は、両者とも中学と高校の文法訳読式の授業に興味をわかず、文法や内容が難しくなるにつれて、次第に意欲を失い、学習もしなくなっている。また、両者ともに、自分の好ましいところはよく覚えているが、失敗したところは思い出したくないので、進んで振り返りの項目に記述しなかったと述べている。1の学生は、それまで自分が海外の映画やドラマが好きなこと、英語学習を関連づけて考えることはなかったが、このように総合的に振り返ることで、関連づけて考えられるようになったと述べている。

2の学生は、これまで進んで学習することはなかったが、中学時代の塾のプレッシャーから基本的なことは学んでいる。さらにこの学生は、大学生の時点で学習に躓き、長期の中断があったが、中学と高校の英語学習の基礎がある程度はできていた。その基礎力のおかげで、大学に復帰後、最近英語学習の必要性を感じてから、自律的な学習にも取り組むことができていた。

英語学習の包括的な振り返りを行った後の聞き取りで、3者に共通していた発言は、以下の通りである。

- ・このような英語学習のスタートから現在 (大学) に至るまでの振り返りははじめであること
- ・長期的な学習過程で同じ失敗を繰り返していること
- ・自分の好きなこと、興味があることと英語学習を関連できること
- ・目標設定 (将来英語でやってみたいこと) を記述することは、現在の学習の励みになること

### 3. 考察

3級以下、以上の両方のグループとも、ポートフォリオを活用した学習の振り返りの有用性を認めているが、英検3級以上のグループの方がその有用性をより高く評価している。

英語の能力が比較的高いということは、これまでもある程度、自分の学習を自己評価し、学習方法の改善に結びつけてきたのではないだろうか。今回、あらためて学習の振り返りを行う中で、学習における振り返りの効用を再確認したのではないかと思われる。それに対して、3級以下のグループは自分の学習方法を進んで改善する機会がなく、その効用を理解できず、当初は「面倒くさい」と感じたのではないだろうか。これは聞き取り調査の、両者ともに、「自分の好ましいところはよく覚えているが、失敗したところは思い出したくない」という発言でも裏付けられる。しかし、聞き取り調査後では、記述内容についてやりとりをする内に、自分の英語学習の方法や態度がどのように形成されかに気づき、その効用を再認識している。リメディアル教育対象者の場合、ポートフォリオをただ渡して、記述させるだけでなく、記述内容をもとに教師と確認作業をすることで、振り返りの効果が実際に認識できると思われる。

また、「小学生から、現在に至るまでの学習履歴」では、記述内容の「学習理解」「学習意欲」「授業」「自己学習」「今後の学習」のいずれの項目も、2つのグループにおいて有意な差が見られた。特に、「授業」「自己学習」および「今後の学習」が他の2項目に比べ、その差がやや大きかった。「授業」「自己学習」および「今後の学習」は、授業内容の分析や自分の学習の進捗状況の把握、将来に渡る学習の目標設定など、比較的高いメタ認知能力を必要とする項目であることから、リメディアル教育対象者の場合、記録方法を自由記述ではなく、選択形式にしたり、記述事例を紹介するなど、自律的な省察への足場作りとなる工夫が必要と考えられる。

言語ポートフォリオの有効性を示す例として、聞き取り調査での「学習で同じ失敗を繰り返し」「自分の関心事と英語学習の関連性」「目標設定の有効性」の3点の発言も注目に値する。これは、振り返りによって自分の学習を管理する有効性に気づいていることを示している。「背景」の章で引用した、「自分の学習管理ができる⇒自律学習につながる（久村、2010）」という生涯学習の視点につながる。

また、リメディアル教育対象の学生の場合、一般的に英語学習への意欲が低い。学習経験を記入するだけでは気づかなかったことが、聞き取り調査によるやりとりで気づいたと指摘していることは、ポートフォリオの適切な活用を支援する指導が、意欲と自律性の向上に役立つ可能性を示している。

#### 4. 結果

目的1：英語リメディアル教育に適した言語ポートフォリオの有効性

結果：学習の自律性を促す方向性において、有効性が認められる。

目的2：英語リメディアル教育のポートフォリオにおける自己省察において、特に配慮すべき項目

結果：ポートフォリオの記述と活用に当たり、比較的高いメタ認知能力を必要とする項目において、その省察の足場作りを支援する指導の必要性が認められる。

## 5. まとめ

今回の調査では、ほとんどの学生が、Can-do形式での到達度の確認はやったことがあるが、英語学習のスタートからの現在に至るまでの振り返りは、これまで経験していないと答えていた。一般的に、EFL環境での英語学習の場合、実際に学習した英語を使用する機会が少ないので、授業以外では自分の学習スタイルとその質をモニターすることができない。その点で、Can-do形式での到達度の確認などの活動と、英語学習のスタートラインからの振り返りは、自律的なモニタリングへの効果が期待できる。特に、リメディアル教育対象者の場合、長期にわたる学習の不成功体験が、その否定的な意識の形成の原因となっている場合が多いので、担当教員の支援の基に言語ポートフォリオを活用して、自分の学習を管理することで、自律的な意識を育み、肯定的な意識へと改善できる可能性がある。ただ、本研究の1度の取り組みを持って、学生の自律性が向上したとは判断できない。今後は継続的に学習の振り返りを行う過程で、自律性の向上を検討する必要があるだろう。

### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 (第33回 第3期第19回) 議事録・配付資料 資料4「平成14、15年度高等学校教育課程実施状況調査について」
- 2) Benesse 教育研究開発センター. 『第1回中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】』(2009).
- 3) 柳瀬和明 (2007)『上智大学英語教員研究会 News Letter 55号』「英検合格者の英語学習・英語使用状況調査の報告」.
- 4) Kiyota Yoichi. (2009) "Motivation of Remedial EFL Learners (A Case Study of Japanese College EFL Learners)", 『リメディアル教育研究』 vol. 4, no. 2, 41-47.
- 5) Rubio, F: Self-Esteem and Foreign Language Learning: An Introduction, Self-Esteem and Foreign Language Learning, 2007, Cambridge Scholars Publishing, 5-8.
- 6) 久村研 (2011) 平成22年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書 研究課題番号: 22320112 「英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究 (A Comprehensive Study on the Framework of English Language Teachers' Professional Development in Japan)」. 7.
- 7) 文部科学省 第4期中央教育審議会「制度・教育部会 学士課程教育の在り方に関する小委員会 (第6回) 議事録」の「学士課程教育の再構築に向けて (審議経過報告)(案)用語解説 (案)(資料8-2)」
- 8) 小嶋英夫 (2010)「第6章 学習者と指導者の自律的成長」『英語教育学大系 第6巻 成長する英語学習者 学習者要因と自律学習』大学英語教育学会監修. 大修館書店. 146.
- 9) 土持ゲーリー法一 (2009)『ラーニング・ポートフォリオ 学習改善の秘訣』. 東信堂.
- 10) Zubizarreta, J. (2004) *The Learning Portfolio - Reflective practice for improving student learning*. Bolton, MA: Anker Publishing Company.
- 11) Council of Europe. 吉島茂、大橋理恵訳. 『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠』2004. 朝日出版社.20.
- 12) 峯石緑 (2002). 『大学英語教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究』. 漢水社. 85-92.
- 13) 神谷健一 (2010). 「TOEIC 対策授業におけるポートフォリオ学習の試み -学習記録用紙・オンライン出席カード・学期末レポート」日本リメディアル教育学会全国大会 (福岡大会) 発表資料.
- 14) 伴一聡 (2007)『21世紀教育センターニュース』「大学入学時の学力差を克服するためには・・・英語教育を例として」弘前大学21世紀教育センター 第11号.
- 15) 鷺巣由美子 (2009)「国士舘大学における到達レベルと外国語ポートフォリオ - ヨーロッパの言語共通参照枠 (CEFR) とポートフォリオ (ELP) を参考にして」『外国語外国文化研究』第19号. 1-28.
- 16) 酒井志延 (2011). 「リメディアルと向き合う」『英語教育』2011, vol.59, no.12, 10-12.